

C'est + 擬似関係節型構文についての一考察

小 川 彩 子

0. はじめに

従来、〈C'est + 名詞句 + qui + 動詞句〉型の構文（以下、「CQ 構文」とする）には、陰題の表示という機能をもつ強調構文としての用法と、(1) のような、いわゆる擬似関係節⁽¹⁾を用いた無題文としての用法があると指摘されてきた。

(1) - Ça ne va pas?

- Laisse, lui dis-je. Ne vous occupez pas de moi. C'est ma mère qui est morte. (川本 1985)

ところが、平塚 (1991) は、(1) は「文脈・状況を受けた *ce* を主題とする有題文である」と主張する。本稿では、(1) のような CQ 構文の *ce* が主題であるか否かについて検討し、結論としては、CQ 構文の *ce* は主題とはいえず、便宜上置かれた「文脈を受けていることを示すマーカー」にすぎないということを主張する。また平塚 (*Ibid.*) は、(1) のような CQ 構文が適切であるためには、「*ce* で指示されて、命題で説明され得るような事柄を、聴者の意識に活性化する具体的な文脈・状況の存在が必要である」と述べている。本稿では、平塚 (*Ibid.*) が CQ 構文の条件であると述べる「具体的な文脈・状況」があるといえるためには、発話の場において、聞き手が何らかを「知覚」により捉えていることが前提条件となることを主張する。

1. 強調構文と擬似関係節を伴う無題文

まず、CQ 構文の二つの用法である強調構文としての用法および擬似関係節

を伴う無題文としての用法について考察する。

- (2) (Pelo と釣りに行ってきた話し手が, Marcelle に魚を見せながら)

Marcelle, regarde! j'en ai pêché deux! Mais les plus gros, c'est Pelo qui les a pêchés! (*Le Grand Chemin*, film de Jean-Loup Hubert, 1987)

- (3) (行方不明になっていた男の子を見つけたことを, 心配して集まっていた人々に報告する場面)

Ça y est! Ça y est! C'est moi qui l'a⁽²⁾ retrouvé! Il est sur le toit! (*Ibid.*)

- (4) (マルティース (M) がふざけてシラスウナギをルイの水着の中に入
れ, ルイが悲鳴をあげた。それを聞いたマルティースの母 (Y) が)

Y: C'est pas bientôt fini ce raffut? Qu'est-c'que tu lui as fait Martine?

M: Euh! Rien Maman! C'est Louis qu'a eu peur des civelles! (*Ibid.*)

- (5) (司祭 (C) が道端でルイ (L) に声をかける)

C: Pourquoi donc t'es pas venu à la messe hier?

L: C'est Pelo qui m'a emmené à la pêche! (*Ibid.*)

(2) および (3) の下線部の関係節内の qui 以下の情報は、それ以前の発話内容および発話状況により既に聞き手に伝わっており、この情報は聞き手にとって新情報ではない。したがって、(2) は「(一番大きな魚を) 釣ったのはペロだよ!」、(3) は「見つけたのは私よ!」と訳すことができ、(2) と (3) の用法は強調構文⁽³⁾であることがわかる。

これに対し、(4) と (5) の下線部の関係節内の情報は、それまでの会話にはでてきておらず、聞き手にとって新たな情報である。したがって、(4) は「シラスウナギを怖がったのはルイよ!」のように訳すことはできず、「ルイがシラスウナギを怖がったのよ!」と訳するのが自然である。同様に、(5) は「釣りに連れて行ってくれたのはペロだよ!」と訳すことはできず、「ペロが釣りに連れて行ってくれたんだ!」のように訳するのが適切である。つまり、(4) と (5) は強調構文ではなく、CQ 構文のもう一つの用法である擬似関係節を伴う無題文であることがわかる。ここで、擬似関係節を伴う無題文について説明している古川 (1984) を参照する。

古川（1984）は、「名詞句 + 擬似関係節は（中略）事態あるいは出来事を、いわば丸ごと、提示している」と述べたうえで（6）を挙げ、「単一判断⁽⁴⁾をなす名詞句 + 擬似関係節は、il y a, c'est, voilà のような導入辞によって先立たれることが多い」、「導入辞に先立たれて統辞的に文をなすことになっても、単一判断をなす点では変りがない」としている。

（6）Mais j'ai quelque chose à vous dire . . . C'est papa qui a perdu sa place.

（古川 1984）

つまり、（4）と（5）は、ある事態をワンブロックで提示する〈名詞句 + 擬似関係節〉部に導入辞 *c'est* が先行したものであり、全体として単一判断をなす無題文であるといえる。

2. 主題の定義

2.1. 平塚（1991）

第1章で述べたように、従来、CQ 構文には強調構文としての用法と、擬似関係節を伴う無題文としての用法があると指摘されてきた。ところが平塚（1991）は、この二つ目の用法について、CQ 構文は無題文ではなく「文脈・状況を受けた指示代名詞 *ce* を主題とする有題文である」（*Ibid.*）と主張する。以下に、平塚（*Ibid.*）の考え方を紹介する。

（7）a. ○ Ton nez coule!（平塚 1991）

b. ○ Il y a ton nez qui coule!（*Ibid.*）

c. × C'est ton nez qui coule!（*Ibid.*）

（8）Y a-t-il quelque chose de divertissant aujourd'hui?（*Ibid.*）

a. ○ – François va jouer du Bach.（*Ibid.*）

b. ○ – Il y a François qui va jouer du Bach.（*Ibid.*）

c. × – C'est François qui va jouer du Bach.（*Ibid.*）

平塚（1991）は、（7）a. と（7）b. は自然な文だが、（7）c. は不自然な文であることについて、「何の脈略も無く新しい事態を伝える場合、SV や IQ⁽⁵⁾は

自然なのに対して、CQ は不自然である。これは、無題文の生起する典型的な場合なので、CQ の無題性をかなり疑わしめるものである」と述べる。また、(8) a. と (8) b. は自然な発話だが、(8) c. は不自然な発話であることについて、「何かが起こったこと、あるいは起こることを前提としない質問に返答する場合も、SV や IQ は自然なのに対して、CQ は不自然である」と述べている。平塚 (*Ibid.*) は他にも多くの例を検証することで、「CQ は、文脈・状況によって活性度の高まった事柄を指示する指示代名詞 *ce* を主題とする有題文である」と結論づけている。

では、平塚 (*Ibid.*) の主張するように、CQ 構文における *ce* は何らかの文脈・状況を受ける機能を有しているといえるだろうか。そこで、CQ 構文である (7) c. および (8) c. が自然な文とみなされる発話場面について考察する。

(9) (A は、B がこちらを見て笑っているのに気付き)

A: Qu'est-ce qui se passe?

B: C'est ton nez qui coule!

(10) (A は、コンサートホールに入ろうとしている B に話しかける)

A: Qu'est-ce que tu fais ici?

B: C'est François qui va jouer du Bach.

(9) の «C'est ton nez qui coule!» の «*ce*» は、たとえば「私があなたを見て笑っているのはなぜか」という内容を表している。また、(10) の «C'est François qui va jouer du Bach.» の «*ce*» は、「私がここにいるのは、なぜか」というような意味である。さらに、第1章で取り上げた (4) の «C'est Louis qu'a eu peur des civelles!» の «*ce*» は、「(お母さんが聞いた) 悲鳴の原因は」のような意味に、(5) の «C'est Pelo qui m'a emmené à la pêche!» の «*ce*» は、「昨日ミサに行かなかった理由は」といった意味になる。これらの例の考察からも、CQ 構文における *ce* は、平塚 (*Ibid.*) のいうように、何らかの文脈・状況を受ける機能を有していると考えるのが妥当だろう。では、CQ 構文は、「*ce* を主題とする有題文である」と考えるべきなのだろうか。2.2. では、主題の概念を検討する。

2.2. 主題の概念

先行研究における主題の概念の定義には様々なものがある。古川（1987）は、「主題の概念の伝統的定義は、たとえば Wagner & Pinchon⁽⁶⁾（1962, p.22）に見られるように、「何かが述べられる対象となるもの」（tout ce à propos de quoi on formule quelque chose）としてよいであろう」と述べており、これが主題の一般的な定義であるといえよう。また、主題の定義において「話し手」の存在について言及されているものとして、「主題は話し手が、それについて解説・説明すべき題目として提示したものである」（佐治 1973）、「「主題」*thème* とは、話し手がこれから言わんとする事柄の中心になる題目を指す」（杉山 1992）というものがある。続いて、平塚（1991）による主題、有題文および無題文の概念を概観する。



図1 活性度のスケール

平塚（1991）は、「文において、活性度⁽⁷⁾のある程度高い部分と、ある程度低い部分が存在した場合、そこに「ある事柄 C1 について、別の事柄 C2 を述べる」と表現し得る事態が生ずる。そこで、C1 を主題、C2 を説述と呼ぶことができる」と述べている。つまり、文において、活性度がある程度高い部分が主題になるということである。では、どのような名詞（句）の活性度が高い傾向にあるのだろうか。図1は、接辞代名詞、固有名詞、不定名詞句を「活性度のスケール」に乗せたものである。接辞代名詞は他の二つに比べると、活性度が相対的に高いことから、主題性が高いと考えられる。もっとも、この活性度はあくまでも相対的なものであり、平塚（*Ibid.*）もこの点に関して「活性度自体が連続的」と述べている。



図2 主題性のスケール

文において、活性度がある程度高い部分が主題になるということは、図1のスケールにおける分布がそのまま図2の「主題性のスケール」にもあてはまることになる。ここで重要なことは、名詞（句）の主題性の高低はあくまでも相対的なものにすぎないということである。例えば固有名詞であっても、聞き手との間で活性度が高いものもあれば、不定名詞句と同レベルと捉えられるものもあるからである。この点について平塚（*Ibid.*）は、「活性度自体が連続的である以上、主題性も連続的な概念たらざるを得ないし、有題文と無題文の分類も截然としたものではない」と述べている。つまり、文において主題性は「ある」「なし」という判断が常に可能なわけではなく、「ある程度高い」「ある程度低い」とのみ評価されることも十分にありうるということであり、有題文と無題文のいずれにもあてはまらない文、つまり両者の中間に属する文も存在するということである。

2.3. 本稿の立場

2.2. の考察に基づき、本稿では、CQ 構文における *ce* は何らかの文脈・状況を受ける機能を有していることから、主題性のレベルがゼロであるとはいえないものの、有題文であると判定できるほどのレベルには達していないと考える。なぜなら、有題文と CQ 構文では話し手の置かれた状況が異なることから、両者を同じ有題文であると捉えることは妥当ではないからである。以下、有題文と CQ 構文の比較を行う。

(11) Pierre, il n'est pas venu. (古川 1987)

(12) (慌ててやってきた B を見て)

A : Qu'est-ce qui se passe?

B : C'est Pierre qui n'est pas venu.

(13) A : Et Marie, elle va bien?

B : En fait, récemment elle a l'air un peu déprimée.

A : Qu'est-ce qui lui est arrivé?

B : C'est son petit ami qui l'a quittée.

一般に、(11) のような文頭遊離構文は有題文であるといわれている⁽⁸⁾。本節では、有題文と CQ 構文の比較を行うため、典型定な有題文である文頭遊離構文の例を用いることにする。(12) は、(11) を CQ 構文に書き換えたものであり、(13) は CQ 構文を用いた作例である。

さて、(11) の話し手は、Pierre について語ろうとしており、自ら Pierre という主題を選択し提示しているといえる。これに対し (12) の B は、Pierre について語ろうとしているのではなく、「Pierre qui n'est pas venu」という事態をひとかたまりとして A に伝えようとしており、この事態が先行文脈を受けていることを示すために「ce」を用いている。続いて、(13) の最初の A の台詞と B の台詞では、前者は Marie が、後者は elle が主題となっている。B は A の質問に対し、例えば Euh, je pense que non. のように elle を主題とせずに答えることも可能である状況において、自らの選択により elle を主題としている。これに対し、二つ目の B の台詞における「ce」は、A の問いかけに答える際に、擬似関係節の内容が先行文脈を受けていることを A に示すために置かれているにすぎない。(12) や (13) の二つ目の B の台詞のように、話し手が聞き手の質問に答える際に、返答内容が文脈・状況を受けていることを示すマーカーとして用いられている「ce」と、(11) の Pierre のような、話し手が数ある選択肢の中から取捨選択して提示した主題を同一視することは妥当ではないと思われる。

CQ 構文は、(12) や (13) のように質問に対する直接的な答えとして使用されるだけでなく、(1) や (4) のように相手からの質問に対する自分の返答内容に説明を加える場合や、(14) のように聞き手の誤解を解こうと弁解する際にも使用される。

(14) J'avertirai ton papa que tu musardes et il te grondera.

– Madame, c'est Poil de Carotte qui m'a dit d'attendre. (朝倉 1955)

上に述べたような場面で使用される CQ 構文に共通する性質としては、聞き手からの質問、非難等のアクションを前提とし、話し手は聞き手が認識している内容を「ce」で受け、伝えたい内容を擬似関係節でワンブロックとして提示しているということが挙げられる。つまり、(11) の話し手のように自由な意思で何について述べるかを選択しているのではなく、先行文脈を受けて語らざるをえない場面において、「ce」を用いることで、ある事態を聞き手にスムーズに提示しているにすぎないのである。

ここで、2.2. で参照した佐治 (1973) による主題の概念を再び取りあげる：「主題は話し手が、それについて解説・説明すべき題目として提示したものである」(佐治 1973)。佐治 (*Ibid.*) は、主題とは話し手が提示するものであるということを主張していると思われる。有題文と CQ 構文の比較、ならびに佐治 (*Ibid.*) による主題の概念を併せて考察すると、以下の結論が導き出される。すなわち、主題とは話し手が数ある選択肢の中から「これについて述べる」ということを自由な意思で選択して提示するものであり、先行文脈を受けて語らざるをえない状況において、伝えたい内容を自然に聞き手に提示する役割を担っているにすぎない表現を主題と呼ぶことは妥当ではないということである。

(15) Qu'est-ce que c'est que ce bruit? (平塚 1991)

a. – C'est moi (lui) qui ai (a) fait tomber une assiette.

b.* – Il y a moi (lui) qui ai (a) fait tomber une assiette.

さて、平塚 (1991) は (15) を挙げ、IQ 構文の実主語として人称代名詞を置くことはできないが、CQ 構文ではこのような制限がないことについて、次のように説明する。「人称代名詞は、一般的に活性度の高い要素なので、文の残りの部分の活性度が低いと主題にならざるを得ない。これは IQ の機能と矛盾を来す。ところが、CQ では、極めて活性度が高い ce が主題となっていて、人称代名詞でも、関係節と一緒にあって説述となり得るので、機能的に安定す

る」(平塚 1991)。平塚 (*Ibid.*) は、ce の活性度は極めて高いと述べているが、はたしてそうだろうか。人称代名詞 II と ce の用法の違いについて論じている東郷 (1988) は、指示対象の確立の度合を示すスケールとして (16) を挙げ、「CE には先行する文脈・発話の状況から特定の名詞句を取り立てて指示する機能はなく、指示内容は空であり、文脈や状況によって外部から規定される」と述べている。

(16) IL > 固有名詞 > 定名詞句 > CE (東郷 1988)

また、川島 (2012) は、「c'est における ce には、もともと積極的な指示 (照応) 機能が欠如している」と述べている。本稿でこれまでに考察した CQ 構文の例をみてもわかるように、ce は文脈を受けており、その指しているものが多少曖昧であったとしても、その文脈・状況に合致していればよいというレベルのものであり、いわば話し手が便宜上、文脈を受けて発話していることを示すために置くマーカーのような存在にすぎない。

したがって、(15) についての平塚 (1991) の「CQ では、極めて活性度が高い ce が主題となっていて」という説明は適切ではないと思われる。また、CQ 構文と人称代名詞が共起するのは、CQ 構文が文脈・状況を受けた発話に使用される構文であり、活性度が極めて高い、すなわち誰を指示しているかが明白である人称代名詞とは相性が良いからである。これに対し、IQ 構文の «il y a» は「これから第三者または事物についてのある事態を伝えますよ」と聞き手の注意を引く働き」(小川 2016) を有しており、いわばまっさらな状況において、話し手があらたに第三者または事物のことについて語る場面で使用される表現である。したがって、IQ 構文は、文脈を受けていることが前提となる人称代名詞とは相性が悪く、共起しにくいのだと考えられる⁽⁹⁾。

本節では、主題とは話し手が数ある選択肢の中から「述べられる対象」を自由な意思で取捨選択して提示するものであり、CQ 構文における ce のように、ある事態が先行文脈を受けていることを示し、スムーズに聞き手に伝えるという役割を担っているにすぎない表現を主題と呼ぶことは妥当ではないという考えを示した。たしかに、「何かが述べられる対象となるもの」という主題の一

般的な定義に照らすと、ce は文脈・状況を受ける機能を有することから、その主題性のレベルがゼロであるとはいえないかもしれない。しかし、本稿が提唱する主題の概念に基づくと、CQ 構文における ce は、便宜上、文脈を受けていることを示すために置かれるマーカーにすぎず、主題であるとはいえないのである。

3. CQ 構文の性質

さて、平塚（1991）は、CQ 構文が適切であるためには、「ce で指示されて、命題で説明され得るような事柄を、聴者の意識に活性化する具体的な文脈・状況の存在が必要である」と述べている。本章では、この「具体的な文脈・状況」という説明を一步進めて、CQ 構文に共通する性質とは何かを探る。

(17) (= (4))

Y: C'est pas bientôt fini ce raffut? Qu'est-c'que tu lui as fait Martine?

M: Euh! Rien Maman! C'est Louis qu'a eu peur des civelles!

(*Le Grand Chemin*, film de Jean-Loup Hubert, 1987)

(18) (= (5))

C: Pourquoi donc t'es pas venu à la messe hier?

L: C'est Pelo qui m'a emmené à la pêche! (*Ibid.*)

まず、(17) の下線部の ce は「(ママが聞いた) 悲鳴は何かということ」というような意味であり、聞き手である母親が、悲鳴を聞いたことが前提となっている。次に (18) の下線部の ce は、「なぜ昨日ミサに行かなかったか」という内容を表しており、聞き手の司祭は、話し手が昨日ミサに来なかったということを視覚情報として把握している。(17)、(18) の例から、(19) の仮説が導き出される。

(19) CQ 構文は、聞き手が「知覚」した内容に基づき、話し手と聞き手の間で活性度の高まった事柄について、話し手が説明を加えるという性質をもつ。

(19) の仮説を念頭に、さらに CQ 構文の考察を続ける。

(20) (3 人はいなくなった少年を探している。水が流れ落ちる音を聞いた A は、水たまりを指さし叫ぶ)

A : Il est là! Il est là!

B&C : (水たまりを見ながら) Où ça?

A : (上空のガーゴイルを指さして) C'est lui qu'a pissé dans la gargouille . . . pour nous arroser!

(*Le Grand Chemin*, film de Jean-Loup Hubert, 1987)

(21) (B の台所の壁のタイルに穴が開いているのに気付いた A が)

A : Qu'est-ce qui est arrivé dans votre cuisine?

B : Quoi?

A : Le trou, les traces là, dans le carreau.

B : Ah, c'est une balle du revolver. C'est un flic qui s'est suicidé dans la cour. (*La mariée était en noir*, film de François Truffaut, 1968)

(20) は、いなくなった少年が、教会のガーゴイルに放尿したことでできた水たまりを発見した A が、B と C に水たまりを指し示す場面である。CQ 構文の聞き手である B と C は、水たまりの存在を視覚により把握している。その後、話し手 A はガーゴイルを指さし、その水たまりは、少年がガーゴイルに放尿したことでできたことを説明している。つまり、ce は聞き手の視覚情報に基づき、話し手と聞き手の間で活性度の高まった「少年と水たまりの関係とはなにか」という疑問を漠然と表しているといえる。次に (21) では、CQ 構文の聞き手である A は、壁のタイルに穴が開いていることを視覚により捉えている。下線部の ce は壁に開いた穴を指しているのではなく、下線部の直前の発話に登場した銃弾が、なぜ台所の壁に飛んできたのかを説明している。つまり ce は、聞き手の視覚情報をもとに、話し手と聞き手の間で活性度の高まった「なぜ銃弾が台所の壁に飛んできたのか」という疑問を指しているのである。このように、(20)、(21) についても、(19) の仮説はあてはまると考えられる。

さて、平塚（1991）は（22）a. を挙げ、「CQ は、文脈・状況を受けた ce を主題とする以上、それ自体である程度完結した説明になっていなければならない」と述べている。

（22）Vous venez avec nous au cinéma ce soir?

a. × -Non, c'est mon père qui est malade en ce moment, et je dois aller le voir. (平塚 1991)

b. ○ -Non, malheureusement, je ne peux pas. C'est mon père qui est malade en ce moment, et je dois aller le voir.

しかし、（22）a. が文として適切でないのは、この文自体で完結した説明になっていないからではなく、CQ 構文の聞き手が知覚した内容に基づく発話ではないからである。（22）b. は（22）a. の場面設定をもとに、適切な文になるように書き直したものである。（22）b. では、「Non, malheureusement, je ne peux pas.」という回答を CQ 構文の聞き手が聴覚により捉えている。CQ 構文の ce は「なぜ今夜映画に行けないかということ」という内容を指しているが、これはまさしく、聞き手が知覚した内容に基づき、話し手と聞き手の間で活性化された内容を表しているのである。

4. おわりに

本稿では、従来、擬似関係節を用いた無題文であるといわれてきた（1）のような CQ 構文の用法につき考察を行い、以下のことを明らかにした。まず、主題とは話し手が数ある選択肢の中から「述べられる対象」を自由な意思で取捨選択して提示するものであることから、先行文脈を受けて語らざるをえない状況において、伝えたい内容を自然に聞き手に提示する役割を担っているにすぎない表現を主題と呼ぶことは妥当ではないということである。ゆえに、CQ 構文の ce は主題とはいえず、便宜上置かれた「文脈を受けていることを示すマーカー」にすぎない。次に、CQ 構文の性質について考察を行った結果、CQ 構文とは、発話の場において、聞き手が「知覚」した内容に基づき、話し

手と聞き手の間で活性度の高まった事柄について、話し手が説明を加えるという性質を有するものであることがわかった。つまり、CQ 構文では、聞き手が何らかを「知覚」により捉え、話し手は、聞き手が知覚した内容を把握している必要があるということである。

注

- (1) 古川 (1992) は、擬似関係節について、「擬似関係節であることの確認は、制限的關係節と異なり、先行詞のみで指示的自立性をもち、また同格的關係節と異なり、先行詞と關係節の間にコンマを入れることができないという基準によって行うことができる」と述べている。
- (2) 文法上正しいのは *C'est moi qui l'ai retrouvé!* であるが、話し言葉ではこのように文法上誤りであっても使用されることがある。
- (3) 平塚 (1991) が、強調構文は「 α が…する (…である)」とも、「…する (…である) のは α だ」とも訳すことができると述べているとおり、(2) と (3) についても各々「ペロが釣ったんだ!」、「私が見つけたの!」のように訳すことが可能である。
- (4) 「単一判断とは、主題を欠く文である」(古川 1984) ことから、ここでの単一判断の文とは無題文のことである。
- (5) ここでいう SV は、(7) a. のような〈名詞句+動詞句〉型の構文を指し、IQ は (7) b. のような〈il y a + 名詞句 + qui + 動詞句〉型の構文を指す。
- (6) *Grammaire du français classique et moderne*, édition revue et corrigée, Hachette, Paris.
- (7) Chafe (1987) «Cognitive constraints on information flow», in R. S. Tomlin (ed.) *Coherence and grounding in discourse*, John Benjamins, Amsterdam. の activation states を、平塚 (1991) は「活性度」と訳している。
- (8) 古川 (1987) は、「文頭遊離要素は常に主題を表わす」と述べている。
- (9) IQ 構文と人称代名詞はまったく共起しないわけではなく、例えば次のような、いわゆるリスト存在文 (東郷 (2006-2008)) では共起が可能である。A: Samedi, il y aura quelqu'un au bureau? B: Ben oui, il y a moi qui travaille! Mon boss m'a donné un gros travail à faire. (作例)

参考文献

- FURUKAWA, N. (1996), *Grammaire de la prédication seconde*, Duculot, Louvain-la -Neuve.
- FURUKAWA, N. (2013), "Émotion et (a)thématicité: le type d'énoncé *Le facteur qui passe! revisité*", *Langue française* 180, 113-126.
- 朝倉季雄 (1955) 『フランス文法辞典』白水社.

- 小川彩子 (2016) 「Il y a Y qui + V 構文と X avoir Y qui + V 構文の働き - 〈名詞句 (Y) + qui + 動詞句〉型表現の分析を通じて -」『フランス語学研究』50, 1-21.
- 川島浩一郎 (2012) 「二つの c'est と指示の問題」『福岡大学人文論叢』44-2, 381-399.
- 川本茂雄 (1985) 『言語の構造 - フランス語そのほか -』白水社.
- 木下光一 (1978) 「フランス語の非人称ヴァリエントと発話の意味構造」『フランス語学研究』12, 1-16.
- 佐治圭三 (1973) 「題述文と存現文 - 主語・主格・主題・叙述 (部) などに関して -」『大阪外国語大学学報』29, 111-121.
- 杉山正樹 (1992) 「1. 主題と説述 thème et propos」『研究年報』39 (学習院大学), 223-254.
- 東郷雄二 (1988) 「Mon frère, il est linguiste et le coupable, c'est lui: 代名詞 IL と CE の用法について」『フランス語フランス文学研究』53, 102-111.
- 東郷雄二 (2006-2008) 「フランス語の存在文と探索領域 - 意味解釈の文脈依存性と談話モデル -」(「会話フランス語コーパスによる談話構築・理解に関する意味論的研究」基盤研究 C 研究代表者 東郷雄二), 1-54.
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房.
- 平塚徹 (1991) 「文脈・状況を受ける c'est NP qui VP」『フランス語学研究』25, 12-24.
- 古川直世 (1984) 「フランス語における擬似関係節について」『文藝言語研究 言語篇』9 (筑波大学文芸・言語学系), 109-134.
- 古川直世 (1987) 「フランス語における主題の概念と遊離構文」『文藝言語研究 言語篇』12, (筑波大学文芸・言語学系), 165-186.
- 古川直世 (1992) 「二次的叙述における形容詞の意味的制約について」『フランス語学研究』26, 1-14.
- 三上章 (1972) 『現代語法序説』くろしお出版.

(文学研究科博士課程後期課程)